ISSN 0910−2396

野鳥だより

−北海道−

北海道野鳥だより第146号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　平成18年12月21日

ヒメウズラシギ

2006. 9.23　石狩浜

撮影者　高　橋　良　直（札幌市手稲区）

もくじ

私の探鳥地（51）　札幌市篠路周辺
札幌市北区　横山加奈子 …… 2
エゾライチョウ笛　美唄市　藤巻　裕蔵 …… 3
スズメの大量死と雪の降り方の関係
小樽市　阿部　永 …… 4
［閑話］野鳥あれこれ　シギ・チドリもそろそろ終わりかな
札幌市中央区　白澤　昌彦 …… 5
礼文島におけるギンムクドリとチゴモズの記録
礼文島　レブンクル自然館　宮本誠一郎 …… 6
新聞情報から　マナヅル …… 7
皆さんへのメッセージ
北海道自然保護協会会長　佐藤　謙 …… 8
江戸時代中期の松前の鳥　－学術報告書から－
広　報　部 …… 9
石狩浜でヒメウズラシギ　札幌市手稲区　高橋　良直 …… 11
室蘭・登別近郊のスズメの生息状況について
自然愛好グループ ヨシキリの会　伴野　俊夫 …… 12
探鳥会ほうこく …… 12
探鳥会あんない …… 14
探鳥会開催地の検討について
探鳥幹事代表　中正　憲佶 …… 15
山口和夫探鳥幹事を悼む　会　長　小堀　煌治 …… 16
鳥民だより …… 16

私の探鳥地（51）　札幌市篠路周辺

札幌市北区　横　山　加奈子

鳥を見始めて10年になります。野幌や西岡、円山などの探鳥会へ参加し、名前や鳴き声を廻りの方々に教えてもらいながら覚えてきました。

退職して時間があるようになり改めて自宅の周りを歩いてみると、山や大きな森はないものの篠路周辺にはたくさんの川があります。この内の３箇所が私の探鳥地となりました。

一番良く行くのは篠路３条10丁目にある五ノ戸の森緑地です。ここはグリンピア篠路を造成する時に屋敷林と伏篭川の河川敷の湿地に沿って残っていた自然林を緑地に整備した所です。そのためケヤキ、サイカチ、ヨーロッパクロマツ、イチョウ、メタセコイヤなど北海道には自生していない樹をはじめトドマツ、キタコブシ、ハルニレ、ヤチダモなどの他クリ、スモモ、ナシなどの果樹が大きく成長し、春一番にはカタクリ、エゾエンゴサク、ニリンソウ等の花々も見られます。４月になりこれらの花が咲き始めるころ親鳥の帰りをひたすら待っているポヤポヤ頭のアオサギのヒナがあちこちで見られるようになります。青空に生える親鳥の冠羽はとてもきれいで思わず見とれてしまいます。肉眼でヒナまで良く見えるところは他には少ないように思います。

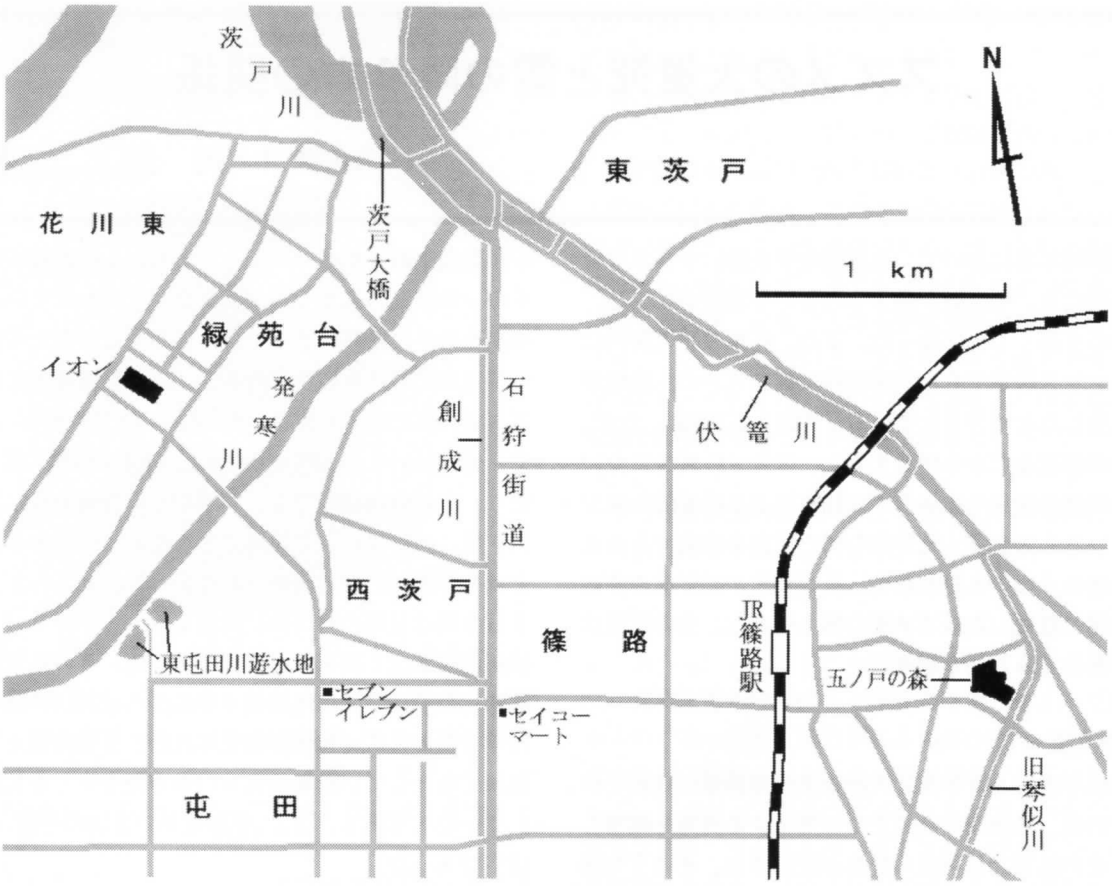
ここで子育てをするカラ類、アカゲラ、ムクドリ、コムクドリ、アオジ、アカハラなどが見られます。タイミングが良いとルリビタキ、オオルリ、キビタキ、シロハラなど通過する鳥に出会えます。ヤマグワ、ミズキ、ハリギリ、ツルマサキ、アキグミなど実のなる木が多いので秋もたくさんの鳥が寄ってくれますし、冬にはシメ、カケスなどの他アトリ、レンジャクがくることもあります。

また、緑地のすぐ横に伏篭川と旧琴似川の合流点もあり、堤防沿いにはヤナギ類、エゾニワトコ、オオイタドリなどが繁り、ノビタキ、オオジュリン、ホオアカ、オオヨシキリ、コヨシキリなど草原の鳥がお気に入りの枝に止まり、今年も来たよと力いっぱいの声で囀っています。川では冬の初めまでマガモ、カイツブリ、カワアイサなどが見られます。

伏篭川や創成川が合流する茨戸川には発寒川も流れています。東屯田川遊水地はその発寒川とつながっている小さな池です。マガモがいつもいますが時にはハシビロガモ、コガモ、シマアジ、オカヨシガモなどがいることがあり、発寒川と遊水地を行き来しています。周りは畑なのでカワラヒワ、ヒバリなどが多く見られます。石狩市緑苑台側の堤防では近くに人家がないせいか五ノ戸の森緑地の周辺で見られる草原の鳥のほかにノゴマが加わります。カワセミ、カッコウ、アリスイがいることもあります。

冬は創成川ウォッチングです。昨年、偶然橋からオオバン２羽を見つけたのがきっかけです。１月にオオバンがなぜ？他にもいるかもと茨戸川の合流点まで行く途中で更に２羽見つけました。今年は２羽確認しています。創成川は凍らないのでマガモ、カワアイサ、ミコアイサ、カイツブリを初めヒドリガモやホオジロガモがいることもあります。３月上旬頃に凍っていた川が溶け始めると殆んど見られなくなります。

以上が篠路周辺の私の観察地です。五ノ戸の森緑地の周辺には住宅が増えてきましたが森の鳥と草原の鳥、水鳥が見られるこの環境がいつまでも守られ、安心して子育てができるところであってほしいものです。



札幌市篠路周辺地図

エゾライチョウ笛

美唄市 藤巻裕蔵

エゾライチョウの狩猟のとき、ハンターは笛で雄の声を真似て近くまでおびき寄せる。狩猟期はちょうどエゾライチョウが秋のなわばりをつくる時期なので、おびき寄せるのに笛の利用は有効な方法である。

この方法を真似して、私はエゾライチョウの調査のときには笛を使っている。北海道ではこのような笛は市販されていないが、ヨーロッパでは狩猟や釣りの道具を扱っている店で笛を買うことができる。国によって材質や形はちがうが、どの笛も吹くと雄の声そっくりの音が出る。材質としては金属製やプラスチック製があるが、私が用いているのは金属のスカンジナビア製で、スウェーデンでエゾライチョウの研究をしていた知人からいただいたものである。春の4～5月、秋の9～10月には雄はなわばりをもち、他の雄が自分のなわばりに入ってきてなくと、早速追い出しにかかる。雄はエゾライチョウ笛にも反応し、なき返したり、大きな羽音をたてながら近づいてくる。

北海道のハンターもエゾライチョウ猟のときに笛と使うが、これはエゾライチョウのこのような性質をうまく利用したものである。ただし、笛は市販されていないので、自分で手作りしている。5円や50円のような穴開き硬貨2枚を3㎜ほど離して固定し、口にくわえて穴に息を吹き込むと雄の声に似た音がでる。あとはエゾライチョウがなくのと同じリズムで吹けばよい。

最近、おもしろい笛を見つけた。ある日遊びにきた甥がラムネ菓子を買ってきて、食べる前に音を出していた。その音がエゾライチョウ笛のものと同じなのである。形は厚みのある円盤状で、中央に穴が開いている。外見は硬貨で作った笛に似ている。私も早速試してみた。出る音はエゾライチョウ笛と比べても遜色ない。しかし、しばらくすると穴の中に水分がたまってきて音が出なくなった。もともとお菓子なので、音が出なくなれば食べればよいわけである。

このラムネ菓子で出した音にエゾライチョウが反応するかどうかまだ試していないが、関心のある方はエゾライチョウのいそうな所で雄が反応するかどうか吹いてみてはいかがでしょうか。

スズメの大量死と雪の降り方の関係

小樽市 阿部　永

2005－2006年冬において、北海道の中央部にすむスズメが大量に死亡し、生息数が減少したという報道がなされ、世間の関心を引くことになった。また、札幌の北大構内におけるセンサス結果でも、2006年春にはスズメの生息数が確実に減少したと報告されている（黒沢ら、2006）。ただ、これまでの報道などから判断すると、スズメの減少については古い死体の発見や給餌台での観察による感覚的な減少を述べているものが多く具体的な死亡原因を追究できるような調査は全くないと思われた。そこで私が40年前の冬に北大植物園で観察したスズメ死亡例を紹介し、その原因について考察してみたいと思う。

植物園のスズメ

私は1961年春より８年間北大植物園内博物館に勤めていたが、この間、植物園に定着または飛来する鳥類を観察していた。その結果70種前後の野鳥が記録され、そのうち20種ほどがここで繁殖しているのが確認された。スズメもその一つで、当時園内には研究のため約100個のスズメ用巣箱がかけられていたため、毎年30番以上が繁殖し100数十羽のヒナが巣立ちしていた。

1961年５月、南極から帰ってきた樺太犬タロは博物館事務所横で飼育され、1970年夏に老衰で死亡するまでをここで過ごした。餌としては洗面器一杯の米麦飯に雑肉を煮込んだものが１日１回与えられていた。

冬期になるとここで定着しているスズメの数は毎年10数羽まで減り、それらはもっぱらタロが食べ残したり、食器の周りに散らばった米飯に依存して生活していた（写真１）。言い換えれば、ここではこの餌量に依存できるスズメの数が10数羽であったということである。この当時は、現在多くの一般家庭の庭先やベランダなどで行われているような小鳥への冬の給餌はまだあまり行われていなかった。そこで積雪期における植物園のスズメは、毎日確実に供給されるタロの餌に大きく依存していたものと思われる。したがって、通常はいくら大雪が降っても、それが夜間の降雪であったり、あるいは昼間でも、間断なく降り続かない限り、スズメはこの餌場にきて採餌できたため、死亡するようなことは８年間で一度も観察されなかった。ところが、1966年１月９日は昼間の時間帯に間断なく大雪が降り、スズメの採餌活動が全く出来ない状態であった。その結果、降雪が終わった翌10日には博物館や事務所の前周辺の狭い地域だけで３羽のスズメ死体が発見された。２羽は雪上で、１羽はねぐらとしていた巣箱入り口から頭を出した状態で死亡していた（写真２、３）。なお地上の２羽のそ嚢（そのう）は空であった。

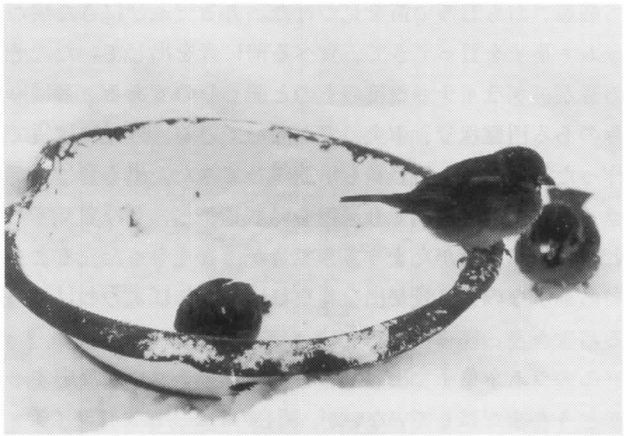


写真１　タロの食器に集まるスズメ（どの個体も黒いのは当時の石炭ストーブの煤煙による

写真２　雪上で死亡していたスズメ

いうまでもなくタロへの給餌は毎日きちんと行われていたため、スズメにとっての餌の現存量に変化はなかったはずである。それにも関わらず前述のような結果が見られたことは、餌の現存量の変化がスズメの死亡原因ではなく、それを利用できる条件の有無が原因といわざるを得ない。

今回の大量死に関連して、餌台には十分な餌があったため餌不足が死亡原因ではないというようなことがいわれる。しかし、これは前述の例から見ても必ずしもそう主張できるほどの根拠にはなり得ない。それには死亡過程の詳しい調査がないからである。

一方、死亡原因となる病原生物がスズメの死体から発見されていないことは餌原因説を支持するものといえるだろう。

写真３　巣箱入口から顔を出して死亡したスズメ

2005－2006年冬における道央域は近年にない大雪に見舞われた。一般に積雪量の正確な記録はあっても、その降り方に関する記録は皆無に等しいといえる。したがって、スズメ死亡問題の原因を正しく追究するためには上述のような条件をきちんと検討する必要がある。

2005－2006年冬においてスズメの採餌活動を不可能にするような間断ない降雪の日がそれぞれの死亡現場においてどれほどあったのか今となっては知る由もない。しかしこの冬、場所によってはそのような日が何日も、あるいは度々あった可能性が高い。また雪の降り方は地域によって大きく変化するため、スズメの死亡多発地が局限することにもなったであろう。いずれにしても、死亡前には耐寒能（体力）の低下をもたらす特異な降雪状態が反復発生していたことは十分予想されるところである。

また、酪農地帯ではスズメの大量死が起こっていないと言われる（黒沢ら、前掲）が、これは当然のことである。一般に酪農家には開放的な乾燥牧草倉庫があり、また畜舎も開放的であるため、スズメが自由に出入りでき、しかも降雪に影響されない採餌場がある。また堆肥置場は発酵熱のため雪が積もらず、冬でも一部の昆虫が発生する。なお1960年代以降、道東で大規模酪農地帯が形成されたことにより、この地方においてハクセキレイが越冬できるようになったが、それには、このような安定した採餌場となる大規模な堆肥置場の形成が重要な背景となっていたことであろう。

多雪地帯の動物は当然のことながらその条件に良く適応しているはずである。しかし、そうではあってもこの冬に見られたスズメの大量死のような例は、時々ある特異な条件下で起こるものであって、何も今回に限ったことではないであろう。ここで示した植物園におけるスズメの死体発見は特異な雪の降り方など観察の幸運に恵まれた結果によるものであったが、降雪が続き死体が直ちに雪中に隠され、死亡直後に発見されないことの方がむしろ多いものと思われる。したがって同様の原因によるスズメの死亡はかなり頻繁に発生しているものと考えるべきであろう。その原因を解明するためには今後検討に耐えるデータを集めることこそ肝要である。

［引用文献］

黒沢令子・徳永珠未・小林和也・平田和彦、2006. 札幌市におけるスズメの激減の記録（2005／06年冬）. Bird Research 2: A19－A24.

［閑話］野鳥あれこれ
シギ・チドリもそろそろ終わりかな

札幌市中央区　白　澤　昌　彦

シギ・チドリを覚えるのは無理とずっと思っていたが、回数を重ねることにより少しづつではあるが識別できるようになってきた。そんなことで、最近はシギ・チドリが面白いのである。

今年も８月下旬に紋別のコムケ湖に行ったが、着いた時間が満潮で良い干潟が出ていないこともあり、残念ながら遠くにやっと数種類を確認した程度であった。次のサロマ湖のキムアネップ岬では近い距離から、ヨーロッパトウネン、コアオアシシギ、ヒバリシギなどが見られたが、種類が少なくてがっかり。次の能取湖ではオグロシギ８羽とオバシギそしてトウネンの小群だった。たくさんの種類のシギ・チドリの中から目の前の鳥を判定していく過程が、悩みながらではあるが、これがまた楽しいのである。

９月の鵡川のシギ・チドリは公式には３種類しか確認されなかった。散会後、地元の方の情報をもとに、同じ場所で粘ることとした。まずは、トウネン、そして足の色や上面の模様が違うオジロトウネンをじっくり観察し覚え込んだ。そのうちエリマキシギそしてアオアシシギとコアオアシシギが一緒に表れその大きさの違いがよく判る。さらにオグロシギ、コチドリ、イソシギの合計８種類14羽を見ることが出来た。札幌近郊の石狩新港周辺は数回見ており、ツルシギ、ミユビシギ、オジロトウネン、ハマシギ、ダイゼン等を確認、そして10月22日にはとうとうハマシギ（43羽）１種だけの確認となり、いよいよ今年のシギ・チドリも終わりかなという感じです。

礼文島におけるギンムクドリとチゴモズの記録

礼文島　レブンクル自然館　宮　本　誠一郎

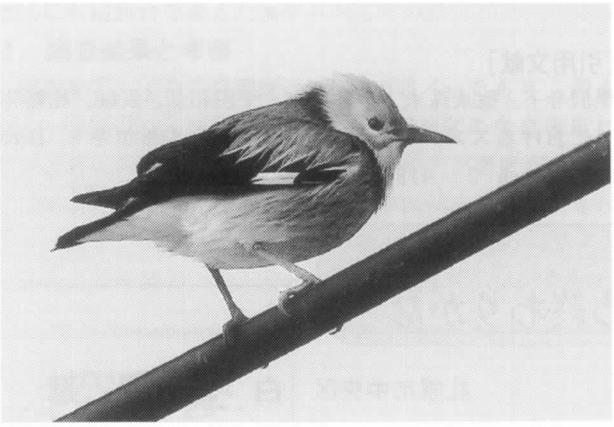
はじめに

2006年春、礼文島にてギンムクドリを初確認撮影、またチゴモズの初撮影ができたので報告いたします。

ギンムクドリ

2006年3月28日、午後3時50分頃、礼文町香深字香深井地区の海岸脇の草原にムクドリ2羽と一緒に、少し変だけれどもコムクドリと思われる鳥がいるのを10分ほど観察しました。地面から餌を探している様子で私の気配に驚き飛び立ち、上の電線にとまり、すぐにムクドリ2羽と山の方に逃げました。この日は同じ海岸にヤツガシラがいたためそちらの様子に集中していました。礼文島ではコムクドリは渡り時期に時折見かける鳥で特に注意をはらっていません。以前ホシムクドリを一度だけ見たことがあり、なんだホシムクドリじゃないのかと残念に思い写真を放置していました。

それからしばらくして4月13日、午前10時頃、同じ香深井の海岸でウミネコを見ていると、20mほど先の防波堤の上に、やはり前述のコムクドリと思われる鳥が1羽でとまっていました。カメラを向けると、さらに遠くに離れてとまりました。距離が離れていたのでこのときもコムクドリと判断してしまいました。



ギンムクドリ　2006. 3.28　礼文島

ギンムクドリ　2006. 3.28　礼文島（右はムクドリ）

そして、5月7日に利尻島鬼脇で、北海道ではまだ記録のないシベリアムクドリとみなされる鳥の観察の連絡が入りました。そういえば、前に変なコムクドリを写真に撮ったことがあるということを思い出し、写真をチェックしてみました。

ムクドリと一緒に写っている写真では、ムクドリとほぼ同じ大きさで、ムクドリに比べて全体的に明らかに淡い。特に頭部と腹部は白に近い灰色。嘴は紅色で先端が黒い。初列風切の基部が白い。足は赤い。このような特徴、特に大きさ、嘴と足の色からみてコムクドリではないことが確かになるとともに、他の特徴を図鑑などと見比べた結果、これはギンムクドリに違いないという確信を得ました。

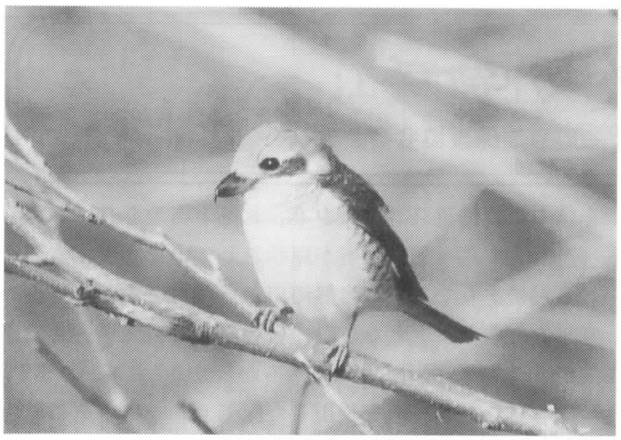
ギンムクドリは南西諸島を中心に近年毎年見られており、最近では関東地方でもまれに見られるようになっているようですが、北海道では初めての記録です。なお、ホームページ上の記載および私信ではありますが、天売島でも今年2006年4月30日から5月13日まで、同島在住の寺沢孝毅氏らによって確認されていることを付け加えておきます。

チゴモズ

2006年5月7日、午後4時半頃、礼文町香深字元地地区桃岩下の草原で初確認しました。今年は春が寒く草原は雪が融けたばかりでキバナノアマナやエゾエンゴサク、ショウジョウスゲが咲き、エゾアカガエルが産卵の時期でした。草原に立つイタヤカエデ、ノリウツギ、エゾニワトコなどの枝先にようやく芽がほころんでいました。そんな枝から地面に飛び降りては、また戻るモズらしい動きをする鳥に気がつきました。車道から双眼鏡で頭の灰色、背の茶色マダラ（横斑）を確認できました。また、胸側から脇腹に縞模様があることから雌とみなされました。

チゴモズは2001年5月28日に礼文町香深字内路地区の内路小学校で死体が拾われ、それを利尻町立博物館に送ったことがありましたが、生体を見るのは今回が初めてでした。近寄って撮影を試みますが、一定の距離まで近づくと逃げてしまいます。30分ほど追いかけて撮影できました。

翌8日、午後5時半、同じ付近を車で走りながら探すと



チゴモズ　2006．5．7　礼文島香深（元地地区）

チゴモズ　2006．5．7　礼文島香深（香深井地区）

やはりまだいました。狭い車道で車の停車ができない場所なので、少し離れた場所に車を置き、慎重に近づき様子を観察しました。草の中に動く虫かカエルをねらっている様子ですが、捕まえた様子は見えませんでした。15分位すると車道を通る車の音に反応して逃げてしまいました。

翌９日は午後２時半から５分ほど香深字香深井地区の緑が丘森林公園内で確認しました。場所が礼文島西海岸と東海岸に離れているものの、前日確認した元地地区から北に10kmほどしか離れていないので、夜の間に移動したことも十分考えられました。でも、過眼線の形状がかなり違っており（写真参照）、前日とは別の個体と思われます。時をほぼ同じくして少なくとも２羽が礼文島に立ち寄ったとみなされます。

以上３日間、礼文島では初めての生体確認でした。藤巻裕蔵氏による北海道鳥類目録改訂２版（2000）には北海道の記録として、かなり前のものと思われる根室と羽幌焼尻島の２例があげられているのみですが、天売島の寺沢氏によれば同島では毎年ではないものの５月には何度か確認されていて、非常に珍しい鳥というほどではないそうです。

― 新聞情報から ―　マナヅル

北海道新聞の地方版には各地域の話題が紹介されるが、今年2006年にはマナヅルについて以下の記事が写真付きで掲載されている。

① ７月５日朝刊：野付半島。具体的な月日は書かれていないが、掲載日に近いものと思われる。タンチョウやアオサギとじっと見合うこともあったとのことである。

② ８月30日朝刊：奈井江町の田んぼ。８月24日に出現し、４日ほど滞在。アオサギが近くにおり、会話するような雰囲気であったという。この記事には、４月から６月にかけて鶴居村や野付半島でも目撃されているとのことが加えられている。野付半島のものは①のものとみなされる。

③ 10月８日朝刊：10月４日に石狩川河口。愛護会会員の観察によると、この個体は石狩川河口から少し入った通称石狩八幡干潟で９月27日に初めて目撃され、以後10月７日までの11日間同所に滞在したことが確認されている。アオサギ、時にはシギ類が近くにいることもあり、多くの探鳥家の目を楽しませた（写真参照）。

④ 10月14日朝刊：10月10日に伊達市長流川河口の新長流川橋付近。12日早朝にも同所で確認された。水浴びを楽しむ姿も撮影されたとのこと。飛来日を考慮すると、この個体は③と同じ可能性がある。

マナヅルはシベリア南東部で繁殖し、九州地方などに渡り越冬する。北海道には何らかの理由により迷行してくるものと考えられ、これまでに10例を越す確認記録がある。昨年2005年４月には宮島沼や月形町、北村一帯の各所で、同一個体（左足首損傷個体）がほぼ同月いっぱい断続的に目撃されている（「宮島沼の会」会報第15号、2005）。

広　報　部

マナヅル　石狩八幡干潟　2006．9.30
品川睦生さん撮影

皆さんへのメッセージ

北海道自然保護協会会長　佐　藤　　謙

北海道野鳥愛護会の皆さんに、北海道自然保護協会の紹介を含んで、初めてのメッセージを差し上げます。

北海道自然保護協会では、会員・理事の個人的な活動とは別に、組織としては単独あるいは他団体との協働によって、サンルダム、平取ダムなどの河川工作物の建設、国有林や道有林における残された天然林の伐採、緑資源幹線林道（大規模林道）や北見道路（高規格道路）などの道路建設、十勝の国有林を中心とした国際ラリーの開催など、公共事業を中心とした大規模な自然破壊問題について取り組んでいます。

① サンルダムや平取ダムの建設計画では、巨大な河川工事がそもそも治水・利水に役立つのか、その説明が余りにも不足、あるいは誤魔化しを続け、謳い文句の「自然との調和（生物多様性の保護）」がないまま、河川における自然の姿を失わせようとしています。新河川法は、従来の目的である治水・利水に加えて、生物多様性の保護を目的にしておりますが、名目と異なって、旧態依然とした自然破壊が続く現実があります。

② 道南の檜山、日高南部、十勝東部などの国有林や、日高南端部などの道有林では、大面積にわたる乱暴な伐採によって良好に残された天然林が失われております。近年、林野行政の基本方針は、従来の「木材生産」よりも「生物多様性の保護、水源涵養、土砂流出防備などを含む森林の公益的機能」を重視するように、方針が大転換されております。しかし、実態は、それとはまったく逆の自然破壊行為が続けられております。例えば、水源涵養や土砂流出防備のために尾根筋に残されてきた、いわば「最後の天然林」に大径木が残されていますが、最近の森林伐採はその大径木を直接の対象として、その周辺の環境を大面積にわたって悪化させ、「極めて乱暴な伐採」に終始しております。

③ 緑資源幹線林道は、目的である大規模林業圏構想がすでに破綻し、道路を造ることが目的化した必要性の認められない車道であり、国道や道道と比較して最悪の規格と杜撰な計画によって掘削され始めております。その長大な路線は、日高南部地域や北見・十勝・釧路地域において多くの河川源流部を横断することから、残された天然林は伐採され、そこに棲むナキウサギ、猛禽類、コウモリ類、希少植物など希少な野生動植物が生息できなくなることなど、生物多様性保護を含む「森林の公益的機能」がまったく軽視され、大きな自然破壊が危惧されております。

④ 北見道路は、見直し中の足寄・北見間と北見・網走間を結ぶ高規格道路計画の中で、北見市街地を避けるバイパスとして真っ先に工事が開始されていますが、市街地の身近にありながら、自然河川と自然林とオジロワシの営巣などがセットとなった、自然らしい自然を選んで道路が予定され、最も大事なところから破壊されております。

⑤ 国有林などの林道を使用した国際ラリーは、そこに棲むナキウサギ、猛禽類などを含む河川流域の生態系に大きな影響を与えております。

以上のほかにも、点々と残された身近な自然が急速に減少していく実態、自然公園においては、自然を安全に親しむことを目的としながら過度に大規模な歩道（木道など）を造成するため、かえって周辺の大事な自然を破壊する事実、希少生物の盗掘・密猟や外来生物の持ち込み、さらには自然再生の名を語った自然破壊など、種々の自然破壊問題があります。これらには、まだ会員・理事の個人活動に任せて、協会活動として取り組んでいない問題が少なくありません。この点は、私たちの課題ですが、協会内外の種々の能力を持った多様な人々が集結し、多くの人々による幅広い取り組みが必要、そのような実感が強い状況です。

私は、自然を守るためには、まず、地域の自然がどのような特徴を持つか、それらの事実を把握し、その価値を評価することを先行させ、次に、それらを多くの方に知っていただくことが問題解決に必ず必要だと思っております。事実の把握と評価、そして周知によって、そこの自然が大切であり、それを破壊する行為が明白な間違いであると批判することができます。

ただ、次の状況を打破しなければなりません。開発予定地の自然の姿を知る場合、開発側は潤沢な予算と多数の人々を使って調査を行い、しかし調査を免罪符として、貴重な自然がない・自然への影響が少ないなどの開発を認める結論だけを周知させております。他方、自然の姿を知りそれを守りたいと思う私たちは、ボランテア活動として限られた時間と予算での調査活動を続けております。したがって、自然の姿を知る活動を続けている私たちは、それぞれの特技を持ち寄る協働作業が必要であり、それによって失われつつある自然の姿を正しく多数の方に知らせる必要があると思います。

この点から、野鳥に詳しい貴会の皆さんには、様々な場の野鳥の実態について基礎調査と情報提供をお願いしたく、それらを切に願っております。私からのメッセージは、一つのお願いとなってしまいました。以上、「基礎的な調査活動における協働」について、どうぞ宜しくお願い申し上げる次第です。

江戸時代中期の松前の鳥

― 学術報告書から ―

広　報　部

財団法人山階鳥類研究所が刊行している「山階鳥類学雑誌」に、同研究所の安田健氏が「江戸時代中期の日本列島の鳥－享保産物帳による－」[1]という報告を発表しています。享保産物帳とは、江戸時代8代将軍徳川吉宗の時に幕府に仕えた本草学者丹羽正伯(にわしょうはく)が、1735年（享保20）に全国各藩の江戸留守居役を呼び、それぞれの領内の動植物その他のリストを作成するように指示し、その結果を編纂したものです。

安田氏の報告では、この産物帳の中から鳥類の部分を抜粋して紹介しています。北は蝦夷地松前領から南は薩摩国まで、藩領単位や郡単位で鳥類リストが載せられています。松前領のリストは次のようになっています。

いかるが	いすか	いとぴりか
うぐひす	うそ	うづら
うとう	うのとり	うみがん
おほはやぶさ	かはがらす	かはせみ
かも	かもめ	からす
きくいただき	きねずみとり	くひな
くまたか	くわいてう	けらつつき
こがら	こしじろ	こまどり
さぎ	さしば	しかべ
しぎ	しじふから	しまふくろ
しめ	すずめ	すももとり
たか	つぐみ	つばめ
つみ	つる	ていこ
とき	どばと	にはとり
はいたか	はくてう	はやぶさ
ひは	ひばり	べにひは
ほととぎす	ほほじろ	ましこ
まつばどり	まめまはし	みさご
みそさざい	めじろ	もず
やまがら	るり	れんじゃく
わし	わたぼしどり	をしどり

この報告[1]では鳥名は書かれているものの、それぞれが今の時代のどんな鳥に相当するかについては書かれていません。実際上、推定すらも困難なものがかなり多いようです。ちなみに薩摩国のリストは以下のようになっています。これらは鳥名であるという前提を持たなければ、一体何を並べているのか見当もつかないというのが正直なところです。

あかひげ	あをかうない	うとふ
かいのしう	かさきり	かねうち
がんあいさ	こすい	こむくだい
しゃくぬき	すいく	なたうしなひ
やぼさぎ		

さて、松前領の鳥は、薩摩国のものに比べると、現在の標準和名に近いものが多く、格段に判りやすくなっています。方言名的なものが少なく、大半が当時の共通語と思われる鳥名で書かれていることが、判りやすく感じさせる原因と思われます。江戸時代の松前地方の鳥名については、淡済如水という箱館在住の人物がまとめた「松前方言考」[2]の「鳥虫之部」にでています。例えば、カモメはごめであり、クイナはやちがとり（谷地が鶏）であります。しかし、享保産物帳では、それぞれかもめ、くひなとなっており、古くから伝えられてきた名が使われています。なお当時は単にくひなと言えば、ヒクイナを指していて、水鶏と書きました。秧鶏(おうけい)という書き方もありますが、これは漢名です。共通語で書かれている鳥名ならば、江戸時代に書かれた鳥名に関する本を調べればある程度のことは判るはずです。例えば「図説 鳥名の由来辞典」[3]に詳しく述べられています。江戸時代に鳥の図が沢山描かれており、図譜としてまとめられています。「図説 鳥名の由来辞典」は、これらに描かれた図から種の同定を試みた本です。とはいえ、「享保産物帳」記載の鳥名には不明のものが多く、ただただ頭をひねるだけです。インターネットに財団法人日本野生生物研究センター「過去における鳥獣分布情報調査報告書」「産物帳記載の鳥名一覧」というホームページ[4]があります。これには調査協力者として安田氏の名前が出ていますので、安田氏の報告書と、比較する際に便利な資料となると思われます。

標準和名が定まるまでの鳥名は、かなり大雑把で、必ずしも種名までは区別されていません。オオルリ・コルリは両方ともるりです。松前藩の鳥名を見て気が付くことは、ワシ・タカ類が多いことで、12%近くを占めています。さらにハヤブサとオオハヤブサを区別するなど、分類が細かくなっており、現在の和名にも近くなっています。松前藩は蝦夷地の産物を商人や本州各藩と交易することで成り立っていました。江戸中期といいますと、まだ、鷹狩り用のタカ類や、矢羽根に使うためのワシ類が松前藩の重要な交易品だった時代です。松前藩としてはワシ・タカ類を商品と

して見ていたと考えますと、共通語的な名が使われていて当然のことかもしれません。鷹狩りの獲物としての鳥名も同様だったと思われます。オオタカなどは年令や雌雄により、値が異なったため、呼び名も異なっていました。一歳鷹のことを黄鷹、その雌を弟鷹(おとだか)と言いました。この弟鷹の値が一番高かったそうです。享保元年の一年間に黄鷹だけで80羽捕獲されたとされています[5]。

先ず、複数の種を含む鳥名ですが、これらは種の同定までしない方がよいと思われます。けらつつきはアカゲラを指しているとみるのが常識的かと思いますが、ケラ類一般と考えておくべきでしょう。江戸時代中期の医者である寺島良安の編纂した絵入り百科事典である「和漢三才図会」[6]の啄木鳥(けらつつき)の項目では、啄木鳥には大小二種類ある、となっています。大の方はアカゲラかアオゲラであり、小の方はアリスイを指しています。北海道では、先ずはアカゲラでよいと思いますが、ヤマゲラも忘れてはならないでしょう。コゲラは江戸中期には既にこげらとなっていたようです[3]。またクマゲラはくろげらです[3]。なお、キツツキ類のことをケラ類とも言いますが、これはけらつつきの省略形です。ましこは猿子鳥のことでマシコの仲間全体を指しますが、「和漢三才図会」に書かれている「雀大、全体は灰黒色、胸・腹は淡赤色、頂は灰黒色で頭から胸にかけて淡赤で白圏があり千葉菊花紋のよう」というのはベニマシコを指していると思われます。次にうそですが、鳥名の呼び方がちょっと違います。雄のことをあかうそあるいはてりうそと呼んでおり、雌はくろうそです[7]。アカウソという亜種は認識されていなかったようです。こがらは、北海道で現在の図鑑を見ている私たちにとってはハシブトガラとしたくなるところですが、コガラの異名にひがらがあり、ヒガラの異名にこがらがありましたから[8]、この両者はかなり混同されて同定されてきたようです。北海道ではと考えれば、ヒガラとするのが妥当かと思いますが、道南のことを考えますと単にコガラとしてよいかもしれません。この種の問題は他にもありますが、後は読者の方々が推定してください。

さて、現在と名が違っている鳥の名のうち、一応、推定できたものを挙げてみます。うみがんはコクガンです[3、8]。きねずみとりは木鼠鳥と書きます。コゲラとも考えられますが[3]、ゴジュウカラと判断する方が妥当かと思われます[3、6]。「和漢三才図会」に木鼠鳥の項目があります。雀大、頭・背などは灰青色、眼の後ろは黒、下腹部は黄赤色等とあり、「つねに山中の樹穴を窺い、そこに住んでいる。それで木鼠と名づける」となっています。しかし、ゴジュウカラはシジュウカラの年老いた姿というのが、江戸時代の一般的な理解であったようです[6]。例えば芭蕉の句に「老いの名も有ともしらで四十雀」というのがあります[9]。こしじろは本当のところは何か判りませんが、「図説 鳥名の由来辞典」には、アホウドリの異名にこしじろというのが小さく出ています。インターネット[4]には「蝦夷志料」が参考文献として挙げられており、そのうちの「本蝦夷部」ではこしじろに信天緑の字が当てられていますが、これは信天縁(しんてんえん)の誤字かと思われます。「図説 鳥名の由来辞典」では信天緑あるいは信天翁(しんてんおう)はアホウドリの漢名としています。しかし、これでは次のしかべと重複します。「和漢三才図会」には信天翁鳥の俗名として青荘(せいそう)(アオサギの漢名[3])が挙げられており、これの説明を読みますと、アオサギの事を述べているようですが、あまりはっきりしません。但し、アオサギは別項目に蒼鷺として取り上げられていて、こちらはアオサギで間違いなさそうです。しかべは、アイヌ語でアホウドリのことです[3]。更科源蔵によりますと、道南ではオシカンペ、道東ではシカベと言ったそうです。そしてニシンを手に持って「シカシカシカ」と呼ぶと寄ってきて手でも捕まえられると述べています[10]。ていこは鵜鶘と書き、ハイイロペリカンのことです[3]。鵜の字は日本ではウと読んでおり、ウの一種という解釈もあったようですが、これは間違っているそうです[3]。鶘の字が頷(あご)にある「えぶくろ」を指しており[6]、この字自体がペリカンを示しているようです。鵜鶘はがらんちょう[6]とも読み、この場合もハイイロペリカンを指します[3]。漢名にも異名が沢山あって、かなり混同されており鵜鶘=伽藍鳥(がらんちょう)と考えられていたようです。問題は当時の北海道にハイイロペリカンがいたかどうかです。まめまわしはイカルかシメですが[3、8]、両方とも既に記載されていますから重複かと思われます。しかし、別の鳥の可能性もあります。わたぼしとりは綿帽子鳥ですが、これはエナガです[3]。

以下、現在の鳥名が全く不明だったものを挙げておきます。すももとり(李鳥)、くわいてう、まつばとり(松葉鳥)です。漢字はインターネット[4]に示されたものを使いました。

江戸時代の医者のほとんどは本草学(現在の薬学。植物だけではなく、獣や鳥も含む)に通じていました。丹羽正伯は本草学者として活躍した人物ですが、同時に医師でもあります。日本全国の産物の一覧表を作ったのも、博学者としても有能な人物であったからと思われます。医師の寺島良安は、本草学に限らず、種々雑多な分野に手を出して、中国の絵入り百科事典「三歳図会」の日本バージョンを書きました。当時の本草学者(医師)としての基本的な立場は、薬として利用できるかどうかにあるわけで、あまり分類学的な興味は持っていなかったと思われます。それと、鳥名を複雑にしているのは、日本で見られる鳥を中国の文献に出てくる鳥と対応させようと、相当無理をしてことにも一因があると感じられます。

この松前の鳥のリストから江戸時代中期の蝦夷地(北海

道）の鳥と、現代の北海道の鳥を正確に結びつけるのはかなり困難と思います。これまで書いてきたこととは別の解釈もあります。それはそれとして、載せられた鳥の名から、古き時代の鳥や、当時の人々の鳥を見る心に思いをめぐらせることもまた一興でしょう。

参考文献

[1] 安田　健. 2005. 江戸時代中期の日本列島の鳥－享保産物帳によるー. 山階鳥類学雑誌　第37巻第1号.

[2] 淡済如水. 1999. 松前方言考. 北の生活文庫8　北海道のことば. 北海道新聞社.

[3] 菅原　浩・柿澤亮三. 2005. 図説 鳥名の由来辞典. 柏書房.

[4] 財団法人日本野生生物研究センター. 1987. 過去における鳥獣分布情報調査報告書. http://www.biodic.go.jp/reports/oldbird/ae017.html

[5] 榎本守恵. 1981. 北海道の歴史. 北海道新聞社.

[6] 寺島良案・島田勇雄等訳注. 1987. 和漢三才図会6. 東洋文庫466. 平凡社.

[7] 中西悟堂. 1979. 鷽替の神事. 定本「野鳥記5」. 春秋社.

[8] 清棲幸保. 1966. 野鳥の事典. 東京堂出版.

[9] 浦本昌紀監修. 1990. 鳥の手帖. 小学館.

[10] 更科源蔵・更科　光. 1977. コタン生物記3. 法政大学出版局.

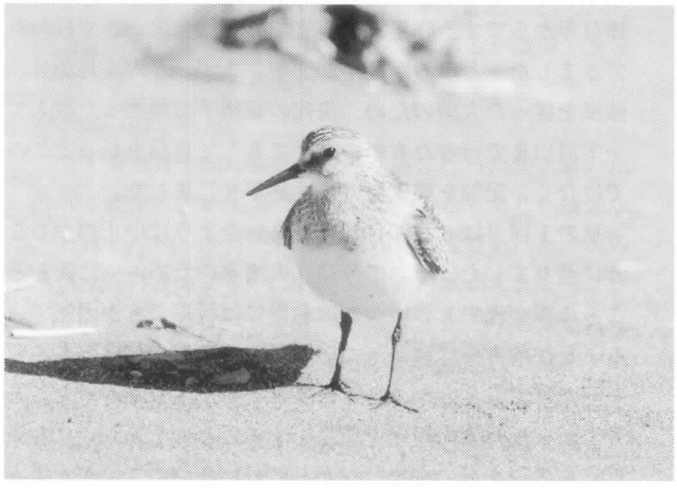
（文責　広報担当幹事　武沢　和義）

石狩浜でヒメウズラシギ

札幌市手稲区　高　橋　良　直

まれな旅鳥とされるヒメウズラシギを観察する機会を得ましたので報告します。

シギ類の渡りの時期にはほぼ毎週、新川河口と石狩浜を見回ってシギ類を観察しています。本年9月23日午後2時頃石狩市の通称石狩浜に行くと、新港東埠頭と石狩灯台の中間あたりで、10羽ほどのトウネンが波打ち際を離れ、砂の上で休息していました。クルマの中から双眼鏡で見ると、中に1羽、見慣れない印象のシギがいました。トウネンよりは少し大きく、ハマシギよりは小さく見え、直感的にこれはこれまでに見たことがないシギだと感じました。足は黒色で、羽色はこれといった特徴がなく、全体にトウネンよりは淡い褐色に見えました。手元の図鑑を見て種を推理すると、足が黒くてトウネンより少し大きいものということから、ヒメウズラシギかヒメハマシギが考えられましたが、羽色からするとヒメウズラシギのように思えました。



ヒメウズラシギ　2006. 9.23　石狩浜

クルマで近寄るとトウネンが敏感に反応して飛び立ち、この鳥も一緒に飛びましたが、さほど遠くない波打ち際に降り立ち、採餌を始めました。チョコマカとしたせわしないトウネンの動きに比べると、ゆったりと落ち着いた動きで採餌しています。採餌中は近づくクルマも気にならないのか、至近距離から撮影することができました。

帰宅後パソコンで写真を見、各種の図鑑で確認すると、やはりヒメウズラシギでした。図鑑がその特徴としている次のような点が合致しています（表紙写真参照）。

① 羽縁の白が目立ち、背が全体にウロコ状に見える（羽の中心に黒い軸斑があり、幼鳥と思われる）。

② 初列風切が尾の先端を越えて突き出ている。

③ 胸に縦斑があって真っ白い腹部との境界が明瞭に仕切られている。

④ 嘴は基部まで黒く、細くて下にやや曲がる。

翌24日にも石狩浜に出かけてみましたが、この日は確認できませんでした。さらに2日後の26日の同じ時刻、ほぼ同じ場所にこの鳥はまだいました。このときはハマシギ2、ミユビシギ1と一緒になって採餌していました。その後は確認されておりません。

ヒメウズラシギは、北アメリカ北部とシベリア北東端で繁殖し、南米アルゼンチンなどで越冬しますので、日本では迷鳥とされています。道内でも過去に数例の観察記録があり、最近では2004年8月に伊達市で観察されたことが篠原盛雄氏によって報告されています（野鳥だより 138号）。

迷い込んで孤独な旅を続けるこの鳥が、いつか仲間たちとめぐり会える日が来ることを祈ります。

室蘭・登別近郊のスズメの生息状況について

自然愛好グループ ヨシキリの会　伴　野　俊　夫

1．はじめに

2006年３月末になって近隣の方々から、「いつも集まる給餌台にスズメが来ないのはどうしてか」とか、「さっぱりスズメ見られなくなったのは何があったのか」という問い合わせがいくつも私に寄せられた。どうやらスズメが激減していることは確かと思われたが、室蘭・登別近隣でのスズメの数や分布に関する以前の調査記録はなく、過去との比較は困難であった。身近な野鳥であるスズメの生息状況を把握しておくことは重要であり、今回の激減をきっかけに、将来に備えて室蘭・登別近隣各地のスズメの生息密度を調査することとした。スズメ激減の原因追及には直接つながりはしないものであるが、得られた結果をここで報告する。

2．調査地と調査方法

図１に示す７カ所にセンサスルートを設定して、2006年４月から５月に調査した。センサスルートの片側幅50ｍの範囲について時速２km程度の速度で歩いてスズメの成鳥を数えた。調査地①～④は樹木や畑、庭の生け垣のある住宅が多いが、⑤～⑦は庭木が少ない住宅街である。どちらの地区にも給餌台を備えた家が点在していた。

3．調査結果と考察

調査地①～④の生息密度は1.2～2.3羽／haであり、調査地⑤～⑦は0.0～0.2羽／haであった。両地区の生息密度に差が認められ、庭木などの多い住宅街の方が密度が高いことが明らかになった。2006年の冬～春は例年より降雪量が多かったが、山奥で特に降雪量の多い調査地③のスズメ生息密度は調査値①、②、④とほぼ同等の2.1羽／ha であり、降雪量がスズメの生息に大きく影響するとは思われなかった。

4．おわりに

今回の報告はスズメ激減とすぐ結びつくものではないが、サルモネラ菌の一種であるネズミチフス菌が分離されたスズメ死体があった登別市住宅街（宇根有美 第６回人と動物の共通感染症研究会学術集会 講演要旨集）は、調査地⑤～⑦と同様の環境であった。死体の調査数が少なく、直接の原因かどうかはさらに検討の必要があるが、⑤～⑦の地域でスズメの生息密度が低かった背景には、もともと庭木などが少ないことがあるが、もしかしたら細菌感染が関わって加わっていたのかもしれない。いずれにしろ、個体群の動向を知る基礎データをとるために、今後も継続的な調査を行って生息状況の推移を追跡したい。

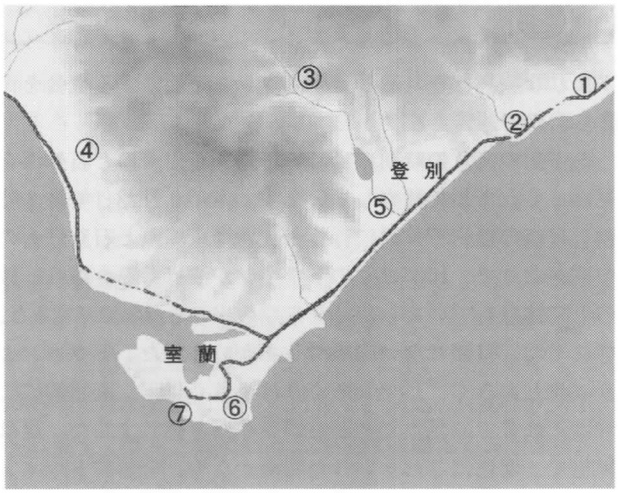


図１　調査場所

鵡川河口探鳥会

2006．8.20

この日の天候は悪くはなかったのですが、数日来の大雨による増水で河口一帯が冠水しました。担当幹事らで話し合った結果、安全第一のため中止とすることにしました。

鵡川河口探鳥会

2006．9．3　札幌市北区　樋口　孝城

例年、鵡川河口探鳥会は春１回、秋２回行われています。春は５月中・下旬で1991年から、秋は８月下旬が1975年から、９月上・中旬、これが最も早くて愛護会設立の翌年1971年からです。昨年2005年までは１回も欠かさず行われてきました。ところが今年2006年、まず、春の５月28日、強風を伴った大雨のため、決死の覚悟？で集まった数人で一応河口まで行ったものの、とてもとても鳥を見るどころではなく、記録を残さないまま終了としました。

秋の１回目は８月20日。先に書いたように中止のやむなきに至りました。そして今回、大増水のため河口に入るところの橋が流失し、いつもの右岸には行くことが困難であることが前もってわかっていました。でも、何はともあれ一回だけでもということで、これまで一度もなかったことですが、反対側の左岸で探鳥をすることにしました。左岸近くには川や海に直接つながってはいないのですが水場もあります。地元の会員の人たちの観察場所は、最近は右岸

側よりもむしろ左岸側の方がメインになっていることも考慮しました。

集合場所の「四季の館」駐車場から車を連ねて左岸側に行き、まずは前記水場での観察でした。ところがここも大雨の後遺症で、シギ・チドリ類が降りるには水位が高すぎ、アオアシシギ2羽とエリマキシギ1羽を見るにとどまりました。水位が低ければ干潟状の部分もでき、トウネンなど小型のシギを楽しめるということでしたが、ちょっと残念でした。左岸岸辺、河口には徒歩で行きましたが、ここも不発。トウネン1羽だけでした。30名を越す参加者に一斉に見られた、ただ1羽のこのトウネンはさぞかし面映い気持ちだったことでしょう。

30年以上も同じ場所で探鳥会を続けていれば、今年のようなこともあるでしょう。こればかりは仕方ありません。来年は無事鵡川河口探鳥会を楽しめることを願っています。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、チュウヒ、トウネン、アオアシシギ、エリマキシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、カワラヒワ　以上　14種

【参加者】赤沼礼子、荒木良一、岩﨑孝博、大荒田忠良、門村徳男、小山内恵子、片山　實・慶子、後藤義民、小堀煌治、佐藤幸典、品川睦生、白澤昌彦・瑠美子、新城　久、高橋良直、徳田恵美、戸津髙保・以知子、富川　徹、成澤里美、樋口孝城、広木朋子、松原寛直・敏子、浜野チヱ子、濱野由美子、原　美保、山田良造、山崎康廣、山本和昭、山本昌子、吉中久子、鷲田善幸　以上　34名

【担当幹事】富川　徹、樋口孝城

野幌森林公園

2006. 9.10

【記録された鳥】カイツブリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、センダイムシクイ、コサメビタキ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カケス、ハシブトガラス　以上　14種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、岩﨑孝博、岩本英樹、今村三枝子、後藤義民、笹森繁明、品川睦生、高田征男、高橋きよ子、田中　洋・雅子、中正憲佶・弘子、成澤里美、畑　正輔、辺見敦子、松原寛直、山田良造、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子　以上　22名

【担当幹事】成澤里美、横山加奈子

野幌森林公園

2006.10. 1

【記録された鳥】カイツブリ、オシドリ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、モズ、クロツグミ、ウグイス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ　以上　18種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、井上公雄、今村三枝子、大賀　浩、香川　稔、勝見輝夫・真知子、栗林宏三、後藤義民、佐藤美栄子、品川睦生、杉田範男、高橋利道、田中洋・雅子、田中志司子、手間本芳博、戸津髙保・以知子、長尾由美子、畑　正輔、浜野チヱ子、早坂泰夫、松原寛直・敏子、山本昌子、吉田慶子、渡邉ひとし　以上　29名

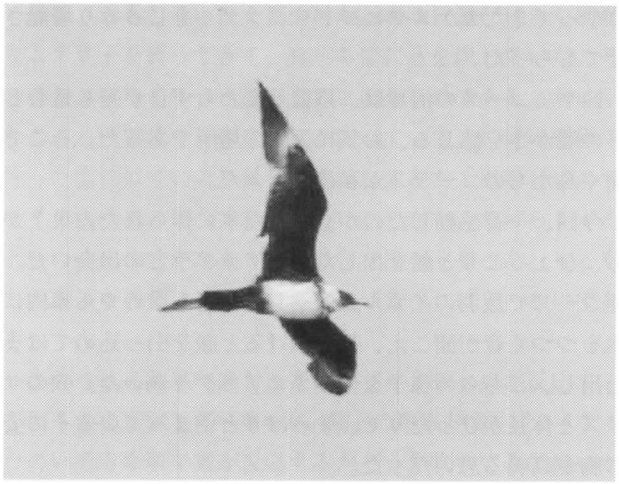
【担当幹事】戸津髙保、松原寛直

宮島沼探鳥会報告に代えて

2006.10. 8　岩見沢市　佐藤　幸典

午前10時の宮島沼は、雨と凄い強風とで探鳥会を実施するには、悪すぎる天候でした。私はこの日の担当幹事の一人でしたが、他にも愛護会幹事が何人か来ていたので皆で話し合いました。その結果、強風のため三脚も立てられない状況では中止せざるを得ないということになりました。それでも誰一人帰る人はいず、では小屋から観察しましょうということで、全員小屋の中に。21人も入ると狭い感じがするくらいでした。

沼からは少し離れていてはっきりとは見えないのですが、「飛んでいるカモメはウミネコだ」とか「ただカモメだ」とか、「ハシビロガモがいた」とか結構楽しんでいました。そのうちにあまり見たことがないような鳥が現れ、あれは何ということで、私が「トウゾクカモメの仲間です」と返事した時から、ワイワイガヤガヤ・・・・。「コグンカンドリだ」、「ミズナギドリの仲間だ」、「シロハラトウゾクカモメかトウゾクカモメか、それともクロトウゾクカモメか？」などなど。そこでカメラを出して撮影。たまたま持ってきていたノートパソコンに取り込んでディスプレイに表示。画像を皆さんに見てもらってあれこれ検討しましたが、尾の形が決めてとなり、トウゾクカモメということで収まり



宮島沼のトウゾクカモメ

ました。皆さんの熱心さで見られたトウゾクカモメでした。

トウゾクカモメは渡り時期に太平洋上などで見られ、沿岸近くにもまれに飛来するのですが、宮島沼のような内陸部にまで来ることはめったにないと思われます。強風に飛ばされてきたのかもしれません。探鳥会自体は中止になりましたが、思いがけない鳥をみんなで見られて良かったと思っています。

野幌森林公園

2006.10.15

然別湖ネイチャーセンター　岡本　真歩

久しぶりの野幌。大学在学中には、鳥類センサスや先輩の調査の手伝いなどで野幌の森に定期的に入ってはいたが、在学中はひたすら鳥を探すことに専念し、それ以外の事に目が向かなかった。なので、今回の探鳥会に参加して、森林公園のイメージが今まで抱いていたものとは、少し違うものになった。

今回は、現在住んでいる然別湖（大雪山国立公園の南西部に位置する自然湖）周辺の森と比較できたことも、また面白い所だったのかもしれない。然別湖の森よりも広葉樹の占める割合が高いため密度を感じず、森全体が明るい印象を受けた。また、様々な大きさや種類の広葉樹が見られただけでなく、ハリギリやハルニレ、シナノキの巨木がこの森林公園にある事に感動した。

野幌の森は、本当に沢山の種類の草木があるので、鳥がいない時は「これは何だ？」と首をかしげながらの散策だったのだが、今回の散歩中、私たちの五感のうち、嗅覚を大いに楽しませてくれたのがカツラであろう。近くに寄れば、すぐに甘い香りがしてきて、知らず近付いていく自分がいた。

紅葉も綺麗で、ヤマウルシやイタヤカエデ、オガラバナ、カツラなどの紅葉や、コシアブラの白い紅葉も目を引いた。ヤマブドウ、コクワなどの木の実も豊作で、木の実を食べにやってきたカケスやヒヨドリ、ツグミをじっくり堪能させてもらった。

四季美コースの沼地は、以前と変わらず日が差し込むと日の暖かさを感じる、お気に入りの場所であった。そこで聞く鳥たちのコーラスが私は大好きだ。

今回、一番感動したのが立枯れた木に作られた古巣？から、ひょっこりと顔を出したオオアカゲラとの出会いだ。桂コースで数羽のイカルと遭遇した興奮も冷めやらぬ内に木をつつく音が聞こえ、目を向けると顔を引っ込めてはまた出し、こちらの様子を伺うオオアカゲラがいた。穴のサイズと体長がぴったりで、すっぽりと治まっているその姿に胸が高鳴る思いだった。

今回探鳥会に参加させてもらい、丁寧に花や木のことを教えて下さるお心遣いがとても嬉しかったし、皆さんの、純粋に鳥との出会いを楽しもう、分かち合おう、というアットホームな雰囲気を感じて、とても溶け込みやすかったです。なにより、鳥を見て「かわいいなぁ」と言い合える事は素晴らしいなぁと思いました。

とても楽しかったです。ありがとうございました。

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、マガモ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、アカハラ、ツグミ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、イカル、カケス、ハシブトガラス　以上　21種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、岩﨑孝博、牛込直人、岡本真歩、後藤義民、佐々木　裕、品川睦生、島田宇大、鈴木敏人、田中　洋・雅子、戸津髙保、成澤里美、早坂泰夫、平野規子、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、安　真一郎、山川美香、横山加奈子、吉田慶子

以上　25名

【担当幹事】岩崎孝博、後藤義民

【小樽港】 2007年1月21日(日)

昨年までは日本野鳥の会小樽支部と合同の探鳥会でしたが、今回は札幌からの貸切バスを利用して愛護会単独で行います。探鳥コースは日和山灯台付近、祝津漁港、小樽埠頭などで、基本的に従来通りです。海ガモ類、カモメ類、ウミスズメ類などが中心です。以下の要領で行いますので、参加希望者は申込下さい。

集合場所　札幌市中央区大通西3丁目
道新ビル前（大通側）

集合時刻　午前8時20分

帰着時刻　午後4時頃

定　　員　45名

参 加 費　1,500円

申 込 先　蒲澤会計幹事（Tel　011－663－9783）
1月5日午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

そ の 他

・大通から小樽まで直行し、小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。

・従来通り、フェリーターミナルで昼食を取ります。昼食を持参下さい。食堂もありますが、混雑の恐れがあります。

・往復とも途中乗車・下車の場所を設けることは予定していません。

【野幌森林公園】 2007年2月4日(日)

雪に覆われた森は、厳しい寒さの中で近づく春を待っています。この時期に見られる鳥たちは、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥と、留鳥のアカゲラ、コゲラ、キバシリ、キクイタダキ、カラ類、そして冬によく見られるウソ、シメ、カケスなどです。運が良ければフクロウも見られるかもしれません。

集　合　午前9時　野幌森林公園大沢口
交　通　新札幌駅ターミナル発
　　夕鉄バス（文京通西行）大沢口入り口下車
　　ＪＲバス（文京台循環線）文京台南町下車
　　各徒歩5分

【円山公園】 2007年3月4日(日)

日中の日差しにも春が感じられる季節を迎えています。キツツキ類、カラ類などのいつも見られる鳥に加え、ツグミ、カワラヒワ、アトリ、ウソ、シメなどが見られます。ハギマシコも見られるかもしれません。さえずりも聞かれ始めます。午前中で解散の予定です。

集　合　午前9時　円山公園管理事務所前
交　通　地下鉄東西線　円山公園下車　徒歩8分

【ウトナイ湖】 2007年3月25日(日)

日本各地やさらに南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時期群れをなして北の繁殖地に渡りはじめます。ウトナイ湖はこれらの渡り鳥の中継地として賑わいを見せ始めます。多くのカモ類の他、オジロワシやオオワシなども観察されます。集合場所からサンクチュアリまで歩き、サンクチュアリ建物内で昼食となります。まだまだ寒い時期ですから、暖かい身支度でご参加下さい。

集　合　午前9時30分　野生鳥獣保護センター駐車場
交　通　千歳空港発のバスがあります。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ち下さい。
☆何れの探鳥会も悪天候でない限り行います。
☆探鳥会の問い合わせは

白澤　昌彦　011－563－5158

探鳥会開催地の検討について

探鳥幹事代表　中　正　憲　佶

今年度の探鳥会は宿泊探鳥会を除いて合計26回です。見られた鳥や参加者の記録を残すことをしなかった「野幌森林公園を歩きましょう」を2003年から正式な探鳥会とした後は、ここ4年間は基本的に同じです。また、野幌森林公園以外についても、藤の沢と小樽港の開催月変更はありましたが、開催開始年以来、同じ月、ほぼ同じ場所で続けてきています。同じ場所をずっと見続け、記録として残していくことはとても大事なことです。その成果は2001年に発行した「私たちの探鳥会－探鳥会30年の記録－」として実りました。まさに「継続は力なり」です。でも、一方では、環境変化などで、見られる鳥が種類や数が少なくなってしまい、探鳥地としての魅力が小さくなってしまったところもあります。また、「いつも同じ場所では‥‥」、「時には違ったところで‥‥」という声も聞かれ始めました。

近年、愛護会会員数が停滞・減少傾向にあります。その原因の一つとして、探鳥会開催地等の固定化があるのかもしれません。そろそろ検討が必要ではないだろうかとことになり、11月1日の幹事会において、来年度の探鳥会予定などが話し合われました。

探鳥会開催地には、交通の便がいいこと、十分な駐車場があること、トイレがあること、一般の人に迷惑がかからないことなど、いくつかの制約があります。もちろん、鳥が見られることは言うまでもありません。これらをふまえた上で、4月にモエレ沼公園（札幌市東区）、8月か9月に石狩浜・石狩河口（石狩市）を入れてみたらという案が出ました。それに伴って、これまでそれぞれ2回行われていた4月の野幌森林公園と8、9月の鵡川河口を1回にすることになります。他にも、宮城の沢（西区）、宮丘公園（西区）、森林総合研究所（豊平区）などが検討されましたが、開催月などの関係から、今後の候補地ということになりました。

なお、千歳川は早朝でなくてもおそらくかなりの鳥が見られること、午前9時ぐらいからであればもっと多くの人が参加できるだろうということなどから、開始時刻を遅くすることが提案されました。

来年度の予定は2月末までに決めなければなりません。それまでに、幹事だけではなく、できるだけ多く皆様に諮っていきたいと思っています。探鳥会参加の時に担当幹事に、また電話や手紙などで私（中正）か戸津副会長にご意見、ご希望をお寄せ下さい。

中正　憲佶　〒063-0866 札幌市西区八軒6条東2-6-13
電話・Fax：011-643-7571
E-mail：kenkiti3@beige.plala.or.jp
戸津　髙保　〒062-0911 札幌市豊平区旭町4丁目1-14
電話・Fax：011-831-8636
E-mail：t-tozu@nifty.com

山口和夫探鳥幹事を悼む

平成17年度から探鳥幹事を務めてくれた山口和夫さんが10月7日に逝去されました。4月9日の野幌探鳥会には体調不良にも関わらず参加してくれ、無理を押して、残雪のラッセルを買って出てくれたのですが、傍目にも顔色が優れず、本人も「いつもと違う」と辛らそうにしていたとのことです。その直後に入院されました。5月17日に手術し6月17日に退院されました。

毎年参加し、楽しみにしていた5月の宿泊探鳥会には、残念ながら参加できませんでしたが、6月18日の東米里、7月2日の福移、7月9日の野幌の各探鳥会には「皆に合いたい」、と顔を見せてくれました。体調が万全ではなく、途中まで歩いたり、車の中で待っていてくれたりでした。我々は回復を喜びこれで大丈夫と、安心したものでした。

病状が悪化し8月9日に再入院されましたが遂に回復しませんでした。山口さんはスマートで長身、髭をたくわえてダンディー、もの静かな人でした。酒をこよなく愛し、必ず参加した一泊探鳥会では最後まで淡々と飲み、帰りのバスでは最後部のイスに陣取りニコニコとワンカップを楽しんでいました。いくら飲んでも冷静で鳥を見た場所などを正確に記憶していて、飲んだ勢いで適当なことをいうと穏やかに「それは違うよ」と、たしなめられたものです。

山口さんのもう一つの趣味はバードカービング、最近は展示会に出品したり、作品も増えていたようです。葬儀委員長も「山口さんのヤマセミのカービングに感動し借りて来て家に飾った」と挨拶していました。探鳥幹事の方も油が乗ってきて‘これから’と期待していました。バードカービングもいよいよ腕が冴えてきて今後の作品を楽しみにしていました。若すぎる逝去は本当に残念です。

葬儀の後、奥様から寄付をいただきました。手紙には「生前はお世話になり、ありがとうございました。皆さまのお仲間に入れていただき数多くの思いでが出来、心から感謝しております」と書かれていました。ご冥福をお祈りします。

会 長　小堀　煌治

鳥民だより

◆新年講演会のご案内

・日　時　平成19年1月13日(土)　13:00～16:00

・場　所　かでる2・7　5階 520研修室
札幌市北区北2条西7丁目（地図参照）
（前年とは場所が違いますのでご注意下さい）

・講　師　盛田　徹 氏
野生動物救護研究会会長
ウトナイ湖野生鳥獣保護センター

・演　題　「野鳥との触れ合い」

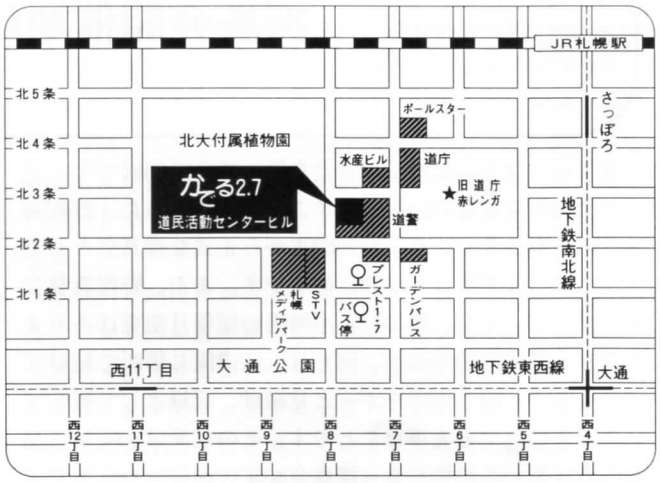
盛田氏は、ウトナイ湖周辺や自宅の庭に来る野鳥の観察、写真撮影、傷病鳥の救護などを通して野鳥との触れ合いを持っていますが、その中でも救護の話が中心になります。盛田氏が救護を始めたきっかけ、これまでに取り扱ってきた種類や数、傷病鳥となった理由、治療やリハビリの方法などにつき、センターや盛田氏宅の施設紹介を交えてお話しいただきます。

・野鳥写真映写

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。たくさんの作品の参加をお待ちしています。スライドフィルム映写およびコンピュータに取り込んだ画像映写の両方ができます。後者の場合には、Photoshop か Power Point で開ける画像を適当な媒体（CDあるいはUSBフラッシュメモリ）に保存して持参下さい。ご不明のことがありましたら、高橋良直さん（BRB32264@nifty.com）にお尋ね下さい。

・会　費　500円

新年講演会場案内図



◆記事の訂正とお詫び

前号（第145号）の、『「私の探鳥地」連載50回を重ねて』の表（3ページ）の下から4列目、利根別原生林の執筆者が佐藤幸典さんになっていますが、大荒田忠良さんの誤りでした。

また、『山田良造さん「北海道の野鳥写真」を出版』の記事（16ページ）中、山田さんの電話番号を間違って載せてしまいました。正しくは011－855－3414です。

大荒田さん、山田さんはじめ、多くの方々にご迷惑をおかけしてしまいました。心よりお詫びして、訂正申し上げます。

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）　郵便振替 02710－5－18287
〒060－0003　札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465
HPのアドレス　http://homepage2. nifty. com/aigokai/